

知的障害者の余暇活動についての事例報告

— A地区の知的障害者学級を事例として —

○ 廣田 治久 栗原 邦秋（余暇問題研究所）

キーワード： 知的障害者、障害者学級、余暇活動

1.はじめに

この事例を報告するにいたった経緯は、A地区において知的障害者の余暇活動に関わる機会を得たことに起因する。この地区では、知的障害者のみならず、心身障害、視覚・聴覚障害など様々な障害を持つ人、そしてその家族に向けた取り組みがなされている。その取り組みは障害者の生活環境を整え、生涯学習環境の整備、自立生活のための支援が主な目的である。なかでも今回、関わる機会を得られたA地区の障害者学級では、年間を通じた知的障害者のための支援活動が行われている。このような障害者を支援する活動は、全国各都道府県を見ても、地域公共団体や障害者支援団体、民間団体、ボランティア・グループが主体となりながら、様々な取り組みがこれまで長年にわたって続けられてきた。今回、このような障害者支援のための活動の一つである障害者の余暇活動、レクリエーション活動の取り組みの現場に触れることが出来た。

障害者とレクリエーションの問題は、これまでも様々なレク活動が障害者にとって有用であることが報告されている。A地区の障害者学級の事例も、障害者のレクリエーション活動として同様の影響を及ぼしているものと考えられる。

そこで、本事例報告の目的は、この学級活動を障害者のレクリエーション活動の充実に向けた取り組みの事例として捉え、その実際現場でしかわからない実状、とくにその運営上の問題を中心に現状をまとめ、報告したいと考える。

2.A地区知的障害者学級の概要

1)その始まり

40年前の1965年に始まる。当初、中学を卒業した障害者に社会性を身につけることを目的に、その保護者が中心となって設立された。設立時は40人からスタートしたが年々増加し、現在は100名を定員としている。

2)現在の教室概要（2005年度）

目的：「知的障害を持つ青年が社会生活を営む上で必要な教養や生活技術を学び、さらに趣味活動やレクリエーション活動を楽しみながら自主的な生活態度を身につける」

学級生：知的障害を持つ青年男女。新規加入に対しては、18歳から29歳まで。

人数：2005年度は96人が登録。平均年齢は27.4歳。最高年齢は39歳

内容：5月から2月までの日曜日を中心に年間17回実施。

趣味講座	・演劇、音楽、料理、軽スポーツ、パソコン
宿泊研修	・二つのグループ分けて、それぞれ1泊2日
教養講座	・物づくり ・ミニ趣味講座
自主プログラム	・外出プログラムなど
行事	・開・閉級式、運動会、忘年会、演芸大会

運営体制：事務局、学級主事、各趣味講座講師、スタッフが協力して運営を行っている。

- ・学級主事：学級生の相談役であり、スタッフのまとめ役、各講師との調整を担う。
- ・スタッフ：主にボランティアを中心に学級生と共に活動、およびサポートを行う。
- ・講座講師：それぞれのもつ専門性を生かし、講座を担当。

3.学級運営の状況と取り組み

活動内容の中でも全17回中の多くを占める趣味講座は、「軽スポーツ」(35人)、「料理」(23人)、「音楽」(16人)、「パソコン」(12人)、「演劇」(10人)の五つの講座からなる。「軽スポーツ」には、全体の約3割が参加しており、希望する学生が多数の場合、年によって人数調整を行っている。学級生の中には、学級以外にも他のスポーツ活動に意欲的に参加している学級生も多い。しかし、実際にスポーツ指導を行う上で配慮することは、学級生の身体能力や理解力、年齢などの個人差である。その指導には、十分な知識や経験を持つ指導者の存在は欠かせないと考える。次に人数の多い料理コースは、学級生の食べることへの興味が高いということもあるが、自立した生活を目指す上で食生活の自立を目指したいという希望もみえる。さらには前年度に行なわれたアンケートを見ると、本人よりもその保護者が希望していると思われる記載も目に付く。

学級の運営全体として大きな課題となっているのは、まず学級生の増加と高齢化の問題があげられる。学級の定員数は設立から年々増加し、現在100名と定めている。ただし、この増加に対応するために、趣味講座は2施設に分散して実施している。しかし、これ以上の増加には対応が難しい現状である。そのため、新規の申し込みに対し、18歳から29歳の年齢的な制限を設け、40歳になると卒業という形態をとっている。このような年齢の制度を設けたこともあり、昨年、40歳以上を対象とした別の学級が立ち上がった。ただし、ボランティアを中心とした運営がなされている。

次にボランティアの募集、および育成があげられる。現在、30名程度のボランティアが登録しており、彼らの支援なくしては学級として十分に機能しないであろう。しかし、この募集に際しては、募集担当者の苦勞も大きい。また、ボランティアと協力した運営を行うためには、学級主事の存在は欠かせないところである。学級生への助言・相談だけでなく、ボランティアとの協力体制をスムーズに進めていくために苦心されている状況が垣間見られた。

4.まとめ

まず、この学級が障害者の余暇活動、レクリエーション活動の充実に大きく貢献していることを実感することが出来た。また、その中に見られた現状から、

- ・参加者の増加や高齢化への対策が必要であること。
- ・参加者の特徴や個人差を十分に配慮できる専門的指導者の必要性。
- ・活動内容には、主催者のニーズや方針、本人のニーズや期待、保護者のニーズや期待、支援者の期待や方針が統合されていることが必要であること。
- ・学級運営には、講師、ボランティア・スタッフなど多くの人の手を結集する必要がある。

これらの人々が相互に協力し、それぞれの役割に力を発揮するためには、ボランティア・マネジメントなどの専門的な見地に立てるコーディネーターの存在が重要であること。以上のような現状から、障害者の余暇活動が充実し、継続的な支援をしていくためには、上記の問題を理解し、対応していくことが重要と考える。また、それらに関係する専門性をもつレクリエーション関係者が積極的に関わっていくことが必要ではないかと考える。